

立案指導についての一考察 2

——保育所実習に取り組んだ学生の立案に対する実態調査——

林 富公子・堀井 二実

1. はじめに

2008年に改訂された保育所保育指針では「保育所は第1章（総則）に示された保育の目標を達成するために、保育の基本となる『保育課程』を編成するとともに、これを具体化した『指導計画』を作成しなければならない。保育課程及び指導計画（以下『保育の計画』という）はすべての子どもが、入所している間、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、柔軟で発展的なものとし、また、一貫性のある者となるよう配慮することが重要である」とある。つまり、「子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」という目標を達成するために、「指針」をベースに園ごとに保育課程を作成し、それをさらに具現化するために「指導計画」を作成することが必要であるといえる。

さらに、指導計画の作成についてより見ていくと「(ア) 保育課程に基づき、子どもの生活や発達を見通した長期的な指導計画と、それに関連しながら、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的な指導計画を作成して、保育が適切に展開されるようにすること。(イ) 子ども一人一人の発達過程や状況を十分に踏まえること。(ウ) 保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。(エ) 具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切に適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにすること。」とある。この指導計画とは、①保育実践における具体的な方向を示すものであること、②子ども一人ひとりが主体的に乳幼児期にふさわしい環境の中で、必要な体験が得られるように見通しを持って作成されるものであることといえる。

これらのことから保育現場で働く保育士はもちろん、保育所へ実習に行く学生にとっても指導計画の作成は重要な事柄であると考えられる。しかし、指導計画の作成方法はどの保育現場にもあてはまる共通のマニュアルがあるわけではなく、それらは「かなり経験則で行われている（渡部 2006）」ため、「現場で働く保育者にとっても常に頭を悩ますもの（渡部 2006）」であるともいう。

さらに、実習生が書く指導計画は、保育課程、子ども一人一人の発達過程や状況、発達過程の見通しや生活の連続性をほとんど踏まえることもなく作成されているのが現状である。そのた

め、高橋（1996）が「『実習用の指導計画』が存在していると言い換えてもいい」と述べているように、現場で書かれている指導計画と実習生が書くそれとは性質が異なるものであるといえる。実際、杉山（2007）は「保育実習Ⅰ^(注)の責任実習については、比較的時間が短く、内容も絵本や紙芝居の読み聞かせなどが多く見られることが特徴である」としている。

このような矛盾に対し、現場の指導計画と学生の書くものの性質が同様のものとなるように、学生が年間指導計画の作成や月の指導計画の作成をし、さらにそれを基に日案の作成に取り組んでいる学校もある（ト田 2008）。学生が日や部分の指導計画を作成するにあたって、指導計画全体の流れを知り、学生本人が作成しようとする指導計画の位置づけを知るという意味ではとても大切な取り組みであると思われる。

しかし、本学科の保育実習（1）の履修者においては11月の保育所実習に参加するまでに取り組まなくてはいけない決められた課題（保育所の機能や役割の説明、自己紹介書や誓約書作成などの事務作業）が多数ある。その為、保育実習（1）に参加する1年生の11月まで毎週のように指導計画の作成だけに取り組むことは不可能である。また、保育実習（1）では「指導実習」よりも、「観察実習」や「参加実習」が主たる目的となっているので、指導計画よりも、記録の作成に重点が置かれる。しかし、保育実習（1）において指導計画（部分実習案）を作成し、実習に取り組む学生がいることを考えれば、保育実習（1）において指導計画の作成についてのレクチャーが必要であることも事実である。

一方、保育実習（2）に目を向けると、保育実習（2）の実習要項に「実習所・園に即した保育計画を作成し実施する」と記されているように、指導計画を作成し、それを実践することが主な狙いとされている。従って、保育実習（2）を履修する学生は8月末から9月にかけて参加する保育実習で指導計画を作成し実践するために前期の授業でより多くの指導計画に関する指導が必要である。

そこで、今回は筆者らが保育実習担当者であるので保育実習(1)(2)における

- ①指導計画の作成に取り組む学生の実態調査をすること、
 - ② ①を踏まえ授業における指導計画作成についての教授方法の内容を見直すこと、
- という2点を目的とし調査をした。

調 査 1

I. 方法

1. 調査対象と調査時期

本学で幼児教育を専攻する短期大学部1年生で保育実習（1）を履修した学生110名のうち、実際に一部でも実習に参加した104名を調査対象とする。

実習終了直後の授業で調査用紙を配布し、その場で記入を求めた。有効回答は80名、有効回答率は.77であった。

2. 調査内容

フェイスシート等や部分実習や全日実習をした回数や設定実習に取り組んだときの子どもの年齢、内容、その内容を選んだ理由の記述を求めた。(論尾末にアンケート用紙を掲載)

II. 結果と考察

1. 実習で楽しかったこと

実習に参加し楽しかったことについての自由記述を求め、78名の者が回答し(.96)結果をTable 1のように分類した。

「能動的な子どもとの関わり」とは「子どもと遊んだこと」、「子どもたちの前で部分実習(絵本・手あそび、ピアノ)をたくさんしたこと」、「いっぱい関わられたこと」、「いろいろな年齢の子どもと関わられたこと」、「普段見ることのできない排泄や着脱の援助もできたこと」などである。一方「受動的な子どもとの関わり」とは「子どもたちがぐっついてきてくれたり、名前をいっぱい呼んでくれたこと」、「名前を覚えてもらい一緒に遊んだこと」、「子どものかわいい姿をたくさん見れたこと」、「子どもたちに先生と呼ばれたこと」、「子どもたちが本当に可愛くていやされた」などを含めた。「保育者との関係」とは、「担任の先生と色々な話ができたこと」、「先生に日誌の書き方をほめてもらった時」で、「かわいい子達は可愛かった」は「その他」とした。

学生が実習で楽しかったことの多くは、「子どもとの関わり」(能動・受動あわせて.97)であった。保育を目指す学生の多くが入学志望動機として「子どもとの関わり」をあげていることを考えると予想通りである。ただ、「その他」の「可愛い子達は可愛かった」や「受動的な子どもとの関わり」にあるように、学生が全ての子どもと満遍なく関わっていたかどうかについては疑問が残る。保育者として仕事に就けば、特定の子どもの関わりだけではなく、全ての子どもとの密な関わりが求められる。自分のところに来ない子どもの心を感じつつ、どのように子どもとよりよい関係を築いていくかが、今後の大きな課題であると思われた。

2. 実習でストレスに感じたこと

今回の実習においてストレスに感じたことを自由記述で求め67名の記述があり(.84)、キーワードに従ってTable 2のように分類した。

「先生との関わり」とは、「園長と先生の連携が全く取れていなくてすごくしんどかった」、「子どもをたたいていた」、「全ての先生の態度・冷たさ」、「先生との関わり、コミュニケーション」、「保育士さんからの視線」などを分類した。

Table 1 実習で楽しかったこと
(複数回答可)

	回答数
能動的な子どもとの関わり	73
受動的な子どもとの関わり	21
保育者との関係	2
その他	1
合計	97

Table 2 実習でストレスに感じたこと
(複数回答可)

	回答数
日誌・記録	39
先生との関わり	24
子どもとの関わり	8
身体的なこと	5
指導案	3
プライベートのなさ	3
雑用	3
その他	5
合計	90

「子どもとの関わり」は、「2歳児クラスで子ども同士のけんかがあり、子どもの言いたいことを言語化することができず、戸惑ってしまった」、「言うことを聞かなくて泣いた時に対応に困った時」、「子どもに対する言葉遣いや言葉がけに悩んだ」、「外遊びでなかなか子ども達が部屋に戻らなかったこと」、「腹立たしいことを子どもに言われても笑顔で答えなければならなかったこと」、「子どもたちがなかなかご飯を食べてくれなかったこと」などとした。

「身体的なこと」には、「体中痛かったりして不調でも、弱音を言ったり休んだりできなかったこと」、「朝起きること」、「寝る時間が減ったこと」などで、「プライベートのなさ」には、「自分の時間がなかったこと」、「家から遠かったこと」、「時間が足りなくて時間に追われているのがつらかった」とした。「その他」には、「終わった時と行く時」、「全体的に不安で緊張した」、「保育士に向いていないことを痛感させられる」、「保育所の雰囲気」をいれた。

「記録」や「指導案」は、学生にとって初めての体験であるのでそれ自体をストレスに感じることは想像できる。しかし、「先生との関わり」や「子どもとの関わり」、「その他」の内容などを見ていくと、コミュニケーションについて負担に思っている学生が多くいることが分かる。

3. 部分実習について

① 部分実習に取り組んだ学生の実態

保育実習（1）では実習要項にもあるように、主に「観察実習・参加実習」を通して保育所保育の役割や目的を理解することを狙っている。しかし、実際は55名の者が部分実習をしており、一回以上指導計画を書いて取り組んだ者は41名であった（毎回書いた者30名、書いたり書かなかったりした者11名）。

Table 3 指導案を書いた回数

回数	人数	計
1	20	20
2	15	30
3	5	15
4	1	4
合計	41	69

また指導計画を書いて保育をした者の回数はTable 3の通りであり、平均1.68回（書いていない者を含めた全体の平均は0.86回）となった。

指導計画を書いて実習することは学生にとって多くの学びがあるだろう。しかし、初めての実習（2週間）で3～4回の指導計画を書いて設定保育をすることは、大きな負担であることと思われる。

② 指導計画作成において困難に感じたこと

指導計画を作成した学生に対し、作成において困難に感じたことがあったかどうかを聞いたところ、「あった」35名、「なかった」6名となった。さらに、「困難に感じたことがあった」と言う学生に対し、どのようなことが難しかったのかと聞いたところ、Table 4のような結果になった。

ここから、やはり「予想される子どもの活動が分からない」だから、「援助」も「時間配分」も分からないということが分かる。しかし渡部（2006）が、「学生は、子どもの年齢別の発達や各領域に関わる遊びについて学習し、実習を行う保育所にも行ったことがあるが、それらを結びつけて計画化すること、特に子どもの姿を想定することが難しいこと」を示していることから

Table 4 困難に思ったことの内訳（複数回答可）

項目	頻度
予想される子どもの活動が分からなかった	15
実習生の援助・配慮事項がわからなかった	14
時間配分が分からなかった	14
こどもの姿が分からなかった	13
ねらいが分からなかった	13
何を書いてよいのか全く分からなかった	12
環境構成が分からなかった	7
何の活動で書けばよいのか分からなかった	5
書くのがめんどくさかった	5
指導案の意味が分からない	2
合計	100

Table 5 具体的に参考にしたもの（複数回答可）

項目	頻度
保育実習で配布されたプリントなど	15
市販されているテキスト	5
その他の授業のプリントやテキスト	4
先輩の指導案	3
日々の実習記録	3
その他	3
合計	33

も、単に「予想される子どもの活動だけが分からない」のではなく、活動自体を細分化して考えたり、計画したりすることにも困難を覚えているのではないかと思われた。

③ 指導計画作成において参考にした資料

指導計画の作成において、資料などを参考にした者 25 名、何も参考にしなかった者 16 名であった。詳細は Table 5 の通りである。その他の授業とは、「乳児保育」と全員が答えた。また、その他の内容は「実習に行く前に先生に教えてもらった」、「保育園の先生に聞いた」、「お姉ちゃんに電話した」であった。

指導計画作成において困難に思っている学生が 35 名いたが、資料を参考にした者は 25 名しかなかった。さらに回答を見ていくと、参考資料を使用した者のうち作成に対し困難を覚えた学生は 22 名、使用しなかった者で作成が難儀であった者は 13 名であった。

このことから、学生の中に①何を参考にしたらよいのか分からない、②参考書の活用の仕方が分からない、③分からないことが分からない、という学生がいると思われた。

④ 事前に授業で教えてほしかったこと

授業で実習前に教えてほしかったことを全ての学生に聞いたところ、Table 6 のようになった。全ての項目に共通することは、思想的なものや法令的なものではなく、実習で実践できる具体的な事柄であると言える。ただ、「けんかの仲裁」などについては、そのケースによって「けんか」に対する関わりは大きく変わってくると思われるが、学生が実習において子ども同士の「けんか」があった場合、どのように援助してよいのか分からず、積極的に関われず困り、事前に授業で取り

Table 6 事前に授業で教えてほしかったこと（複数回答可）

項目	合計
日誌の書き方	16
指導案の書き方	12
手遊び	7
けんかの仲裁	3
月齢・年齢に合わせた遊び	2
わらべうた	2
余裕を持って授業をしてほしかった	1
合計	43

上げてほしかったと、学生は思っていると考えられる。しかし、保育とはいつもマニュアルに沿って進められるものではなく、偶発的なことを多く含むものであるがゆえに、学生の臨機応変さのなさが伺える。

また、「手遊び」、「わらべうた」、「月齢・年齢に合わせた遊び」については、すでに堀井の乳児保育授業で取り上げている。しかし、学生が休んでいた時の手遊びなどに関するプリントを取りに来なかったりすることもあり、このことから、学生自身の実習に対する意識の低さが垣間見える。

⑤ 部分実習の実際

保育実習（1）における部分実習の実際は Table 7 の通りである。指導計画の有無に関わらず、最も部分実習でなされた活動は、絵本であった（計画あり 36、なし 21）。次に、指導計画ありでは、ピアノ（6）、ゲーム（6）、手遊び（5）、製作（5）、ペープサート・紙芝居（4）、その他（2）となった。その他とはお別れ会のことである。指導計画なしでは、ペープサート・紙芝居が6、ピアノと手遊びがそれぞれ4であった。絵本を選んだ理由としては、「園から指定された」、「子どもが絵本を好きだった」、「絵本が一番簡単だと思ったから」などというものが多かった。

尚、指導計画の作成を困難に思わなかった学生6名の部分実習の内容は、絵本4名、ペープサート2名であり、おのおのが1回の部分実習であった。同じように、絵本やペープサートに取り組んだ学生であっても、複数回部分実習をした者は指導計画の作成に当たって困難に覚えるようである。

尚、指導案を書いた者で実際の活動内容が未記入の者が3名だったので、38名が対象である。

Table 7 部分実習の実際

		絵本	ペープサート 紙芝居	ピアノ	手遊び	ゲーム	製作	その他	合計
指導計画あり	0歳児	2			1				3
	1歳児	9		1			1		11
	2歳児	15	1	2	1		1		20
	3歳児	2	1	3	1	1	1		9
	4歳児	4	1		1	4	1		11
	5歳児	0							0
	その他	4	1		1	1	1	1	9
指導計画なし	0歳児	4		2	2				8
	1歳児	5		1					6
	2歳児	4	1						5
	3歳児	2	1		1				4
	4歳児	3	1	1	1				6
	5歳児	1	2						3
	その他	2	1						3
合計	57	10	10	9	6	5	1	98	

調査 1 まとめと考察

学生の指導計画の作成に当たって、保育実習（1）に参加する学生は、①活動自体を細分化して考えたり、計画したりすることにも困難を覚えているのではないかと思われたこと、②複数回部分実習をした者は、指導計画の作成を困難に思うこと、③ペープサートや絵本以外で指導計画の作成をした者はその作成を困難に思うこと、④指導計画の作成のための参考資料を見ても参考方法が分からない場合もあること、という4点が明確になった。

このことから保育実習の授業はもとより、担当者の授業において次に示すようなことに取り組む必要があるといえる。①保育実習（1）の指導計画でよく取り込まれる「絵本」の活動を細分化して学生とともに考える、②指導計画の子どもの活動の欄に①を記入する、③②がその年齢の子どもの姿にふさわしいか吟味する、④学生が考えた子どもの活動に対し、年齢別に保育者の援助と留意点に関して環境構成を踏まえて考える機会を持つ、といったことに取り組む必要性が示された。

また、実習（1）の中では指導計画や記録の指導だけではなく、実習の重要性についても述べていく必要があると考えられた。

調 査 2

I. 方法

1. 調査対象と調査時期

調査1とは異なる、本学で幼児教育を専攻する短期大学部2年生で2009年度に保育実習（2）を履修した学生98名のうち実際に実習に参加した97名を調査対象とする。実習終了後、約2ヶ月たったあとで保育実習（2）の成績開示に参加した者に調査用紙を配布しその場で記入を求め回収した。63名の回答があり、回答不備4名を除く59名の回答を有効回答（有効回答率 .60）とした。

2. 調査内容

調査Iと同様である。

II. 結果と考察

1. 実習で楽しかったこと

実習に参加し楽しかったことについての自由記述を求め59名の記述があり（1.00）Table 8のように分類した。

能動的な関わりには、「子どもたちとかかわれたこと」、「0歳児とも関わられたこと」、「毎日子どもと遊べたこと」などとした。子どもの成長には、「一回目の実習でみた子どもたちの成長が見れたこと」、「去年見た子たちの成長した姿が見れたこと」などとした。受動的な子どもとの関

Table 8 実習で楽しかったこと
(複数回答可)

	回答数
能動的な子どもとの関わり	30
子どもの成長	14
受動的な子どもとの関わり	13
様々な経験	8
慣れた園	4
保育者との関係	3
その他	2
合計	74

く接していただき、日誌のアドバイスも丁寧にしていただいたこと」、「先生といろんな話ができただこと」などとした。その他には、「毎日がとても楽しかったです」や「毎日楽しかった」を入れた。

学生が実習で楽しかったことの多くは、子どもとの関わり（能動、成長、受動）(.77)であった。特に保育実習（2）では、子どもの成長を感じることに喜びを持っている学生もいることから、就職後も日々子どもの成長を感じつつ保育を行っていくことにつながるのではないかと思われた。

2. 実習でストレスに感じたこと

今回の実習においてストレスに感じたことを自由記述で求め（43名、.73）キーワードに従って Table 9 のように分類した。

先生との関わりには、「何をしたいのか分からず、聞いてもスルーされた時」、「実習生のことが放置状態で、連絡などいきわたっていなかったこと。」、「主任が分かっていることまで注意してくる（毎回）のがストレスだった」など、実習場所では「前回嫌だったのもう一度同じ場所に行くと言うこと」、「実習先が遠かった」などを分類した。突然の実習とは、「設定保育や律

動を急に「して」と言われたこと」など、子どもとの関わりは「なかなかいうことが子どもたちに伝わらないこと」、実習生同士とは「お別れ会を他の学校と一緒にすることでなかなか話がまとまらなくて大変でした」とした。

「記録」を書くことは、保育実習（2）に参加する学生であってもストレスに感じる事が分かると同時に、「先生との関わり」が保育実習（1）と同様に多いことから、やはり、先生との関わりを負担に思っている学生がいることが改めて伺えた。

Table 9 実習でストレスに感じたこと（複数回答可）

	回答数
日誌・記録	16
先生との関わり	15
指導案	10
実習場所	4
突然の実習	2
一人での実習	2
子どもとの関わり	1
実習生同士のこと	1
合計	51

3. 設定保育（部分実習）について

① 設定保育に取り組んだ学生の実際

保育実習（2）に参加した学生の指導計画作成の回数は Table 10 の通りである。保育実習（2）では実習要項にもあるように、(1)の「観察実習・参加実習」を踏まえ、実習所・園に即した保育計画を作成し実施する「指導実習」に取り組むことがねらいにあるように、56名の者が取り組み、3名の者が取り組んでいない。指導計画の有無は、指導計画ありが55名、指導計画なしが1名であった。

指導案を書いて保育をした者の回数は Table 3 の通りであり、平均 1.72 回であった。

② 指導計画作成において困難に感じたこと

指導計画を作成した学生に対し、指導計画作成において困難に感じたことがあったかどうかを聞いたところ、「あった」39名（71%）、「なかった」16名（29%）となった。具体的に難しかった点は、Table 11 の通りである。その他の理由は、「保育像が具体的に考えられていなかった」、「絵本読みで指導案を書くのは初めてだったのでどこまで書けばいいか分からなかった」、「急だったので、活動内容に困った」であった。

保育実習（1）の学生と異なり、指導計画の意味が分からなかった者は0名であった。これは、保育実習（2）は幼稚園実習の後にあるために、幼稚園実習においても指導計画の作成が多いこと、保育実習（2）の授業内容ではより指導計画の作成に対する取り組みが多いことにより「指導案は何をするものであるのか」ということは分かっていることが考えられた。

また、「時間配分が分からない」、「ねらいが分からない」など多くの項目において、今現在の「子どもの姿」そのものを捉えられていない為に計画が立てられず、指導計画の作成が困難になる学生が多くいるのではないかと考えられた。

しかし、保育実習（1）、幼稚園実習が終了した後の学生であるにもかかわらず、「何を書いてよいか全く分からなかった」と答えた者が5名いた。これは①指導計画そのものの意味が十分に分かっていないこと、②一つ一つの項目に書く内容が分かっていなかったことが考えられる。今回、その学生が幼稚園実習に参加したか否かということについての質問はしていないので、「何を書いてよいか全く分からなかった」と答えた学生が幼稚園実習に行ったかどうかは分からない。しかし保育実習（1）、（2）の授業においても指導計画に関する取り組みを複数回持って

Table 10 指導計画作成の回数

回数	人数	計
1	30	30
2	16	32
3	5	15
4	2	8
5	2	10
合計	55	95

Table 11 困難に思ったことの内訳（複数回答可）

項目	頻度
時間配分が分からなかった	19
ねらいが分からなかった	17
予想される子どもの活動が分からなかった	11
実習生の援助・配慮事項がわからなかった	11
書くのがめんどくさかった	9
こどもの姿が分からなかった	8
何の活動で書けばよいか分からなかった	7
何を書いてよいか全く分からなかった	5
環境構成が分からなかった	4
その他	3
合計	94

いる、にもかかわらず「分からない」と答える学生がいることに注目し、①学生としての授業や実習に対する取り組み方、②学生の習熟度に応じた授業展開ということを改めて考えていかなければならないと思われた。

③ 指導計画作成において参考にした資料

指導計画作成において、何かの資料を参考にし作成した者 48 名 (.87) 参考にしなかった者 7 名 (.13) であった (Table 12)。1 年生に比べ、資料を参考にし指導計画を作成した学生は多かった (1 年生は、した者 .61、しなかった者 .39)。そのほかの授業のプリントやテキストの内訳は、教育実習の研究 2 名、言葉 1 名、未記入 4 名であった。また、その他は、先生からのアドバイス、保育実習 I の指導案、前の指導案、実習支援室の資料、市販されている保育雑誌であった。

Table 12 具体的に参考にしたもの
(複数回答可)

項目	頻度
幼稚園実習の指導案	27
保育実習で配布されたプリントなど	25
先輩の指導案	23
日々の実習記録	12
その他の授業のプリントやテキスト	7
市販されているテキスト	5
その他	5
合計	77

このことから、保育実習 (2) を選択する学生は①参考にすべき資料が分かっている、②活用の仕方が分かっている、ということが言える。

④ 指導計画作成において事前に授業で教えてほしかったこと

保育実習 (2) は保育実習 (1) と異なり、実習要項にもあるように設定保育をすることが前提となるため、「指導計画作成において事前に授業で教えてほしかったこと」について自由記述で回答を求めた。結果、11 名の記述が得られた。

内訳は、指導案 (先輩のなど) をたくさん配布してほしかった (3 名)、指導案の書き方のポイントについて (2 名)、もっと書く時間を増やしてほしかった (2 名)、言葉の使い方などの実践事例を知りたかった (1 名)、設定保育のいろんな主活動を知りたかった (1 名)、9 月の指導案を教えてほしかった (1 名)、園によって書き方が違うと思うので特にありません (1 名) であった。

この結果から、指導計画作成における不安もうかがえるが、「園によって書き方が違うと思うので特にありません」以外の回答から、より実践で使用できるツールを学生は必要としていることが分かった。

⑤ 設定保育の実際

設定保育に取り組んだ者 58 名中、未記入の者 1 名を除く 57 名を調査対象とした。全日実習をした者のべ 14 名 (17 回)、部分実習をした者のべ 51 名 (88 回) であった。

製作が最も多く、その理由として、子どもの日常の姿から選んだものがある一方で、「用意もすぐできる」という自由記述にもあるように、製作は学生にとって取り組みやすい課題であると言える。また、保育実習 (1) の学生と比べて、幅広い内容で実習に取り組んでいることが分かった。さらに、指導計画の作成を困難に思った学生と思わなかった学生との関連についてみる

Table 13 部分実習の実際

		製作	絵本	ゲーム	エプロン・パネル シアター	リズム	遊び	新聞紙 遊び	運動	ごっこ	ピアノ ・歌	生活	その他	合計
指導案あり	0歳児	1	1				2							4
	1歳児	3	3				2	2		2		1		13
	2歳児	3	3		3	4		1		1		1	2	18
	3歳児	9	2	4	4	4	1	1	3	1	1			30
	4歳児	6	5	7	3									21
	5歳児	2			2			1	1					6
	その他		2						1					3
指導案なし	0歳児										1			1
	1歳児		1											1
	2歳児													0
	3歳児	3	1								1			5
	4歳児											1		1
	5歳児			2										2
	その他													0
		27	18	13	12	8	5	5	5	4	3	3	2	105

と、実際に指導計画を書いた回数や、内容においてもほとんど差は見られなかった。

このことから、保育実習(2)の学生は、前向きに様々な内容に取り組もうとしている姿が考えられた。

調査2 まとめと考察

保育実習(2)に参加した学生は、指導計画の作成に当たって、「時間配分が分からない」、「ねらいが分からない」など多くの項目において、今現在の「子どもの姿」そのものを捉えられていない為に計画が立てられず、指導計画の作成が困難になる学生が多くいるのではないかと思われた。普段、学生として実際に保育現場と関わることが少ない学生にとって、「子どもの姿」を的確に捉えることが容易ではないことは明らかである。しかし、実習の授業はもとより他の授業においても子どもの姿が教授されることがあったことを考えると、学生の中には実習と授業が結びつきにくい者や主体的に考えることが少ない学生もいると思われた。

これらのことから、保育実習(2)の授業展開においても学生が主体的に指導計画を考えられるように、①記録から指導計画を作成することに取り組むこと、②①をベースにおいてよく取り組まれる事柄、製作、ゲーム、リズムなど、年齢別に部分的な指導計画の取り組みを充実させることを盛り込んだ。

まとめと今後の課題

調査1と調査2を通してつぎのことが分かった。

この調査を実施した目的は、授業における指導計画作成についての教授方法の内容を見直すことであった。従って、この調査結果を参考に2010年度のシラバスや教授方法の内容を見直した(調査時期が2009年10月～11月であったので、結果をシラバス作成に間に合うように1月の時点で出した)。具体的に保育実習(1)においては、①必ず取り組まなくてはいけない課題が多くあること、②保育所実習だけではなく、施設実習における事柄にも取り組まなくてはいけないことから、シラバス上の変更点はない。しかし、学生の実態、①参考資料の参考の仕方が分からない、②活動自体を細分化して考えたり、計画したりすることにも困難を覚えている、ことを踏まえて授業に取り組みたいと思う。

保育実習(2)においては①全体的な1日の流れの指導案を作成する前に、記録から指導計画を作成することに取り組むこと、②①をベースにおいてよく取り込まれる事柄、製作、ゲーム、リズムなど、年齢別に部分的な指導計画の取り組みを充実させることを盛り込んだシラバスを作成した。これらの取り組みに対しては、引き続き検討していきたいと思う。

また、保育実習(1)(2)に限らず、学生の実習に対する意識の低さ(欠席回数や、欠席した場合の処理など)も深刻な問題と思われる。学生のモチベーションに関しても今後考察しなくてはならない課題と思われた。

追記 調査1は2010年度乳幼児教育学会第20回大会にて口頭発表したものに修正を加えたものである。

注 学校によって最初の実習を、「保育実習 I」と表記する場合もあれば「保育実習(1)」の時もある。従って「保育実習 I」と「保育実習(1)」は同じ扱いとなる。

文 献

- 渡部(君和田)容子 2006 保育指導計画の意義と指導計画の立案指導 鳥取短期大学研究紀要第53号 P 31-38
- 杉山喜美恵 2007 責任実習における現状と問題点-保育実習Iと保育実習IIを比較して- 全国保育士養成協議会第46回大会研究発表論文集 p 88-89
- 厚生労働省編 保育所保育指針解説書 2008 フレーベル館 p 20-21, 124, 130, 136-137
- ミネルヴァ書房編 保育所保育指針幼稚園教育要領解説とポイント 2008 ミネルヴァ書房
- 穴戸健夫 2009 実践の目で読み解く新保育所保育指針 保育の計画・カリキュラムと評価を中心に かもがわ出版
- ト田真一郎 植田明 平野真紀 2007 保育者用養成校における「子ども理解に基づく長期指導計画作成」の取り組み 全国保育士養成協議会第46回大会研究発表論文集 p 224-225
- 高橋貴志 1996 実習における指導計画に関する一考察-問題の所在と課題- 聖セシリア女子短期大学紀要第21号
- 松村和子 2004 幼児の教育課程・保育計画・指導計画-指導計画の役割・機能を考える- 文京学院大学研究紀要6, 85-97

[はやし ふくこ 幼児教育学]
[ほりい ふたみ 保育学]

実習についてのアンケート

皆さん実習お疲れ様でした。実習によって得たものも大きかったと思いますが、逆に困ったこともあったと思います。今後の実習指導の参考にさせていただくために今回のアンケートをとらせていただこうと思います。どうぞよろしくお願いします。

なお、答えて頂いた内容は無記名で回収後、コンピューターにて一括集計して取り扱いますので、決して皆さんや周囲の人々にご迷惑をおかけすることはありません。また、結果は目的以外には使用しませんので安心してお答えください。

林富公子 堀井二実

－記入上の注意－

- I. 答えは最後の質問までもれなく記入してください。
- II. 日々感じておられることをそのままお答えください。
- III. 記入はボールペンか鉛筆を使って番号に○をして下さい。
記入例 ① 男 2 女
- IV. []には質問に当てはまる答えをお書き下さい。
記入例 [26]歳
- V. 答えがその他の時には〈 〉内に出来るだけ具体的にお書き下さい。

I. 実習についておたずねします。

① あなたは今回どの施設に実習に行きましたか？

(1. 保育所 2. 施設

3. その他〈

〉)

② 今回の実習で楽しかったことはどのようなことですか？

③ 今回の実習でストレスに感じたことはどのようなことですか？

Ⅱ. 設定保育(全日実習・半日実習・責任保育)について

- ①. あなたは今回の実習で設定保育をしましたか？(1 した ・ 2 しなかった)
- ②. ①で「した」に○をした人におたずねします。その時に指導案を書きましたか？
- (1 毎回書いたく)回 2 書いたときもあれば書かない時もあつたく)回書いた
- 3 全く書かなかつた 4 その他く)
- ③. ①で「した」に○をした人におたずねします。あなたが指導案を書く時困つたことがありましたか？
- (1 あつた ・ 2 なかつた)
- ④. ③で「あつた」と答えた人にお聞きします。どのようなところが難しかったですか？(複数回答可)
- (1 何を書いていいのか全く分からなかつた 2 指導案の意味が分からなかつた
- 3 書くのがめんどろくさかつた 4 こどもの姿が分からなかつた
- 5 ねらいが分からなかつた 6 環境構成が分からなかつた
- 7 予想される子どもの活動が分からなかつた 8 実習生の援助・配慮事項が分からなかつた
- 9 何の活動で書けばよいのか分からなかつた 10 時間配分が分からなかつた
- 11その他く)
- ⑤. ①で「した」に○をした人におたずねします。あなたは指導案を書くときに何か参考にしましたか？
- (1 した ・ 2 しなかつた)
- ⑥. ⑤で「した」と答えた人にお聞きします。何を参考に指導案を書きましたか？(複数回答可)
- (1 保育実習の授業で配布されたプリントなど
- 2 その他の授業のプリントやテキストなどく)の授業)
- 3 先輩の指導案 4 市販されている実習テキスト 5 幼稚園実習の指導案
- 6 日々の実習記録 7 その他く)

⑦. あなたが指導案を書くときに指導案の用紙で(日付、天候、組、年齢、人数を除く)何から書き始めますか？

- 1 子どもの姿 2 主な活動 3 ねらい
- 4 時刻 5 環境構成 6 予想される子どもの活動
- 7 実習生の援助・配慮事項 8 その他< >

⑧. 指導案を書くに当たって事前に授業でしてほしいことが何かありましたか？

⑨. あなたが取り組んだ設定保育について下記の表に従って記入してください。

	部分・全日 実習	指導案の 有・無	主活動	年齢	その主活動を選んだ理由
例	☉ ・全	☑ ・無	どんぐりの リズム	3 歳児	ピアノが好きだったのと 11 月の実習だったのでどん ぐりを選んだ。
①	部 ・全	有 ・無		歳児	
②	部 ・全	有 ・無		歳児	
③	部 ・全	有 ・無		歳児	
④	部 ・全	有 ・無		歳児	
⑤	部 ・全	有 ・無		歳児	
⑥	部 ・全	有 ・無		歳児	

ご協力ありがとうございました。